

CSW 報告 3月3日

【日 付】3月3日、8:00

【場 所】CCUN Chapel

【題 目】Worship

【担 当】World YWCA

【内 容】CSW の開催期間、Church Center では毎朝 8:00 から礼拝が行われており、今日は当初の予定より一日遅れて世界 YWCA の若いリーダーたちが礼拝を担当した。テーマは「stereotyping 固定観念化(からの脱却)」で、国際色豊かな世界 YWCA チームらしい礼拝となった。「I love you Lord」の讃美と招詞、日本語を含む世界各国語で歓迎の挨拶に始まり、祈りと罪の告白の祈りに続いて、讃美歌を数曲歌った。聖書のヨハネ 4:14 を英語、日本語、アラビア語で朗読した。Meditation では、現代版「井戸のそばの女性」にまつわる詩を朗読し、参加者にあらかじめ参加者に手渡しておいた、女性が直面している課題を表現する言葉(「固定観念化」、「無関心」、「糾弾」、「迫害」等)が書かれた紙切れを、「All to Jesus I surrender」を歌いながら 1人1人がびりびりに裂き、決別の象徴とした。祝福の後、皆で西インド版主の祈りを歌い、最後に手をつないで「Bind Us Together Lord」を歌って締めくくった。

【感 想】パレスチナとベリーズ出身の若い女性リーダーが中心となって企画した今日の礼拝では、讃美歌が 10 曲以上も歌われ、また、女性が自分らしく生きることを阻む固定観念からの脱却というメッセージが大変印象深かった。YWCA がキリスト教基盤の団体であることを改めて強く意識し、ノン・クリスチャンの私ではあるが、YWCA を通じてキリスト教に触れる機会を与えられたことを嬉しく思う。毎朝の礼拝と NGO プリーフィングが行われる Chapel のある Church Center for the United Nations は、CSW 会期中の平行イベントの開催場所ともなっており、世界中から集まる NGO のために活動場所と情報を提供している。国際連盟の時代から YWCA を始めとするキリスト教基盤の団体が連帯し、平和と人権を訴える原動力となってきたこと、その伝統が脈々と受け継がれていることを誇りに思った礼拝であった。(吉田)

【日 付】3月3日、12:00

【場 所】CCUN Drew Room Ground Floor

【題 目】Women, Education and Peace Building Implementing UNSCR 1325

【担 当】World YWCA

【発表者】Faten Husari, [Maylena David](#), Arda Aghazarian, Kuena Diaho, Okondo Hendrica, Sarah Arumugam

【内 容】今回のイベントは題の通り、UNSCR1325 の実行と現状についてのものであった。まずは、パキスタンの YWCA から来たフェートゥン、マリーナ、アーダの三人の話から始まった。フェートゥンはパレスチナについての、地理的、歴史的な話をし、それに伴う女性や子供の経済状況や生活について語った。マリーナは、パレスチナにおける女性の教育と仕事についての話をした。交通機関が少ないこと、イスラエルによって建てられている分離壁によって、移動が大きく制限されること、また、チェックポイントでの時間のロスなどにより、毎日職場や学校に通うことができず、その結果仕事や教育を受ける場を失っている女性が大勢いることといったパレスチナでの現実を語った。アーダは、パレスチナの YWCA の若い女性のリーダーシップ育成、女性の権利とジェンダーの促進といった活動について説明した。レソトから来たクウェナは、内戦によって多くの女性の命が奪われてしまっていること、軍による女性の殺害やレイプが横行していることを語り、UNSCR1325 に基づいたより強い女性の保護などが必要だと話した。サラ(スリランカ)は、スリランカには、多くの移民により、多くの言葉や宗教、文化、価値観などがあるという背景を語り、そうした民族の対立のために紛争が行われていることを話した。紛争下で、人権侵害などの被害にあうのは、やはり多くが女性や子供であり、そうした状況下で女

性の教育を促進し、女性の地位の低さを改善しようとYWCAは活動しているという。これら世界の各国からきたユースメンバーとヘンドリカの話の後、参加者の質疑応答に入った。

【感想】現在の日本では多くの女性や子供が当たり前のように教育を受け、働いている。しかし、かつての日本では男尊女卑といった考え方に基づいた生活をし、女性は専門的な教育を受けることもなく、定職に就くこともほとんどなかった。そして、そういった状況を変えていったのは、女性たち自身である。今回の話を聞いて、やはり、教育の機会も、仕事も、権利も、ただ待っているだけでは手に入れることができず、現状を変えるためには、自ら行動していくことが必要なのだと感じた。今はまだ、そうした努力が報われずに苦境にいる女性や子供が大勢いるが、そうした人たちが一日も早く、迫害や暴力を受けることなく、人間としての権利のもとに、教育を受け、仕事を得て生活できるように私たちも行動しなければならないのだと感じた。また、各国のYWCAではそういった女性たちの行動をサポートするために頑張っているのだということも知ることができた。私たち日本人は、今の様な環境に感謝し、行動してくれた昔の女性たちの努力をもっとありがたく思うべきであるとも思った。(小山)

【日 付】3月3日、16:00～17:30

【場 所】CCUN, 2nd Floor

【題 目】Human Trafficking, Exploitation, and Abuse of Sex Workers: Suggested Remedies

【主催者】Appignani Bioethics Center under the auspices of CSW 55

【形 式】パネルディスカッション

【発表者】Charlotte Bunch (ラトガース大学 女性グローバル・リーダーシップ・センター、「女性の権利は人権である」の言葉で有名。病気のため欠席) Frances Kissling (ペンシルバニア大学 生命倫理センター) Rachel Resnick (作家) Adele M. Stan (ジャーナリスト) Michelle Chen (ジャーナリスト)

【内 容】主催団体 Appiganani Bioethics Center の初代所長 Ana Lita がモデレーターとして、売買春目的の人身売買をめぐる廃止主義と規制主義の議論を概観した。次に Frances Kissling が病気で参加できなかった著名な人権活動家の Charlotte Bunch からのメッセージも交えて、売買春目的の人身売買被害者の救済について、セクシュアリティをめぐるモラルの立場からではなく、人権の枠組から考えることが大事であることを強調した。フェミニスト・ジャーナリストの Adele M. Stan からは、米国メディアにおいて FOX など保守的・右翼的な風潮が見られる中、何よりもメディアにおけるこの問題の扱い(米国内でも売買春目的の人身売買は深刻な問題でありながら、メディアでセンセーショナルに取り上げられるのは発展途上国の気の毒な少女が人身売買の被害に遭っているところを救済される、という英雄的行為ばかりである)を変える必要があり、そのためには NGO 側がメディア向けにキャンペーン戦略を練るべきだというアドバイスがあった。*Love Junkie: A Memoir* などの著書で知られる作家の Rachel Resnick は、自身も一歩間違えると売春婦になっていたかもしれないという体験から、数年前までは売買春の合法化に賛成していたが、現在では北欧型の取組(第5日目 2月25日 Where Buying Sex is Illegal: The Nordic Model 報告参照)を支持する立場に変わったという。若きジャーナリストの Michelle Chen の、売買春を労働とみなす立場からのコメントと質疑応答は時間切れとなり、途中で打ち切られてしまった。

【感 想】セックスワーク論に代表される売買春をめぐる立場の違いは、フェミニズム運動を二分するものであり、人身売買への国際的取組の前進の妨げともなってきた。売買春目的の人身売買の被害者は「売春婦 = 犯罪者」とレッテルを貼られ、被害者でありながら処罰の対象となり、本国に強制送還されて、そこでも差別や暴力を受けることもある。被害者は売春婦としてではなく、一人の人間として扱われ、その人権と人間としての尊厳を尊重されなければならない。また人身売買被害者の救済策についても、警察による売春宿の取締りといった短期的な解決策によるのではなく、被害者に対する教育や就職支援、第三国への定住も視野に入れた長期的なアプローチが必要であり、何よりも貧困や差別、暴力、教育を受ける機会の欠如といった人身売買の根本原因をなくすことが大切である。(吉田)

【日 付】3月3日、17:00

【場 所】2 UN Plaza DC2-1386

【題 目】Young Women's Caucus

【内 容】前回のコーカスでドラフトについての話し合いは終了したため、今回は来年のコーカスについて話し合った。来年のコーカスのために今年は何をすべきか、来年はどうしたらより効果的なコーカスになるか、などについて意見を交換した。主に出た意見としては、やはり今年のコーカスについて、そして来年どういうことをするのかといった「情報」を事前にまたはCSWの最中に知ることが有用であるということだった。そのために、フェイスブックなどといったソーシャルネットワークサービスを利用したり、ビデオや冊子を作成するといった意見もあった。また、自分たちがこのコーカスで話し合った結果を、それぞれの国の政府からの代表へどのようにして伝えていけばよいか、どうすれば話すチャンスが得られるかといった話もあった。

【感想】今回が最後であったが、毎回コーカスに参加する度に、参加者の積極性と自主性に驚かされた。今回のコーカスでは、来年のことについての話し合いが主であり、このコーカスが一時的なものではないこと、ずっと継続させたいと思っているメンバーの気持ちを強く感じた。来年のコーカスをより効果的なものにするためには、来年の参加者に向けて何をすべきか、現実的に自分たちにできることは何かを、今年から考え、計画し、行動することで、コーカスはつながっていき、そしてより良いものになっていくのだと感じた。(小山)

【日 付】3月3日、19:00

【場 所】国際連合日本代表部

【題 目】CSW 55 NGO プリーフィング第2回

【主催者】国際連合日本代表部

【内 容】

0) 自己紹介

1) 木村公使による概要

第2回目から参加した NGO メンバーのために、第1回とほぼ同じ内容で合意結論案・3本の決議の進捗状況、UN Women の誕生について、UN Women と CSW の今後のあり方について話をうかがった。

2) 橋本日本代表の所感

CSW も2週目に入り、NGO 関係者の数が減ったため、二次パスなしで North Lawn Building で行われるパネルや一般討議を傍聴できることになったこと、週末に UN Women 初代事務局長で前チリ大統領の Michelle Bachelet を招いて NGO による UN Women 誕生を祝う会が催されたこと、日本では女性団体でさえ UN Women や安保理決議 1325 についての関心が薄いこと、また以前は合意結論において国際人口開発会議や北京行動綱領に言及することさえ渋っていた米国がヒラリー・クリントン国務長官の就任以降、うって変わって積極的になったこと、またクリントン国務長官が昨年10月に安保理で行われた、女性と平和、安全に関する安保理決議 1325 採択 10 周年を記念した公開討論にも参加していたことなどを聞いた。

3) 質疑応答

NGO 側から再び、外務省や内閣府男女共同参画局の HP で CSW の文書の日本語訳を早く掲載してもらいたいとの要望があった。また、UN Women に期待される役割と、戦略計画・予算・組織編成面での今後の流れについて説明があった。

【感 想】

先週の第1回に比べ、NGO 側の参加者が激減し、江尻美穂子さん、YWCA から小山、吉田、ほか2名のわずか5名であった。発言できる絶好のチャンスだったが、合意結論に日本政府として特に盛り込みたい内容は何か、という漠然とした質問しか出来なかったことを残念に思う。日本代表部側には、今回新たに文部科学省、男女共

同参画局、厚生労働省、JICA からも出席があった。今回も、UN Women の誕生について日本政府側も女性 NGO も関心が薄いことが話題に上り、橋本代表から「YW でも事業などで UN Women について積極的に言及して欲しい」と言われた。UN Women の存在が身近に感じられるかどうかについては、日本語名をわかりやすくすることも大事なポイントと思われるので、橋本代表が提案されたように「ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための女性機関」ことが一目でわかるような名称を工夫して欲しいと思う。最後に、男女共同参画局の 2011 年度版 Women and Men in Japan というオールカラーの立派な冊子をいただいたので、是非読んでみたいと思う。(吉田)